

大覚寺襖絵付属の引手金具

— 障壁画群の成立経緯をめぐって —

久保智康

はじめに

障壁画は、城郭や書院建築における空間装飾の重要な構成要素として、絵画史は当然のことながら、建築史の分野においても様々な形で論究されている。一つの障壁画群の画題やその配置、大きさなどが決定される際、パトロネージを中心として、建築、絵画両サイドの協業による立案作業を必要としたであろうことを想定するだけでも、上記両研究分野の「協業」の至当性は十分存在しよう。

ところが、かかる障壁画研究も、こと付属の金具類に関しては、主たる分析資料として顧みられることはほとんど皆無に近い。しかし、遅くとも障壁画完成に近い段階で金具のデザインが決定され、それに基づき相当数の金具が製作されたことは、障壁画の歴史的総合評価に当たって正当に位置づけられるべきものであると考える。

小稿では、大覚寺障壁画群の成立年代、成立経過をめぐる議論を一つのケーススタディとして、特に襖絵付属の引手金具の検討作業

が、かかる問題にどこまで有効性をもつものかを考察する。また資料操作方法とその結果を踏まえ、大覚寺引手を製作した金具工房の実態を探りつつ、工芸史あるいは手工業生産史における引手金具の資料学的位置づけを行いたい。

一 問題の所在

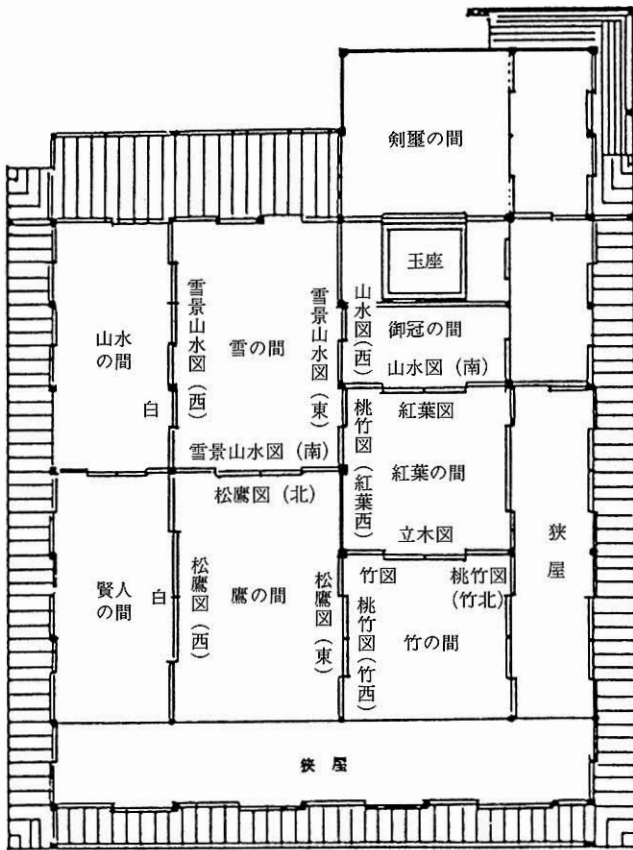
平安時代初め、嵯峨天皇の離宮嵯峨院にはじまり、貞観十八年(八七六)に淳和天皇皇后の正子内親王によりその名が与えられた大覚寺は、鎌倉時代には後嵯峨・亀山・後宇多上皇が政務を執った嵯峨御所として、また続く南北朝時代にはこの皇統「大覚寺統」が北朝と対立するなど、歴史の表舞台で常に重要な位置にあった。大覚寺に伝わる美術工芸品や歴史資料は枚挙にいとまがないが、¹⁾中で最も広く紹介されているのが狩野山楽や渡辺始興らの筆とされる障壁画群である。

これらに作者名や落款、年記等はないので、もっぱら絵画様式や

建物の建造年代の検討によって障壁画そのものの成立が議論されることになる。ところが、著名な作品群にもかかわらず、これらが「いつ、何処で描かれ、どのようにして現在の障壁画の状態になったのか」、諸説は必ずしも一致を見ていない。障壁画は、宸殿と正寝殿の両建物に配置されるが(挿図一)、第一にこれらの築造経緯が不明である。以下、障壁画成立をめぐる建築史・美術史の各説を概観する。

ア 宸 殿

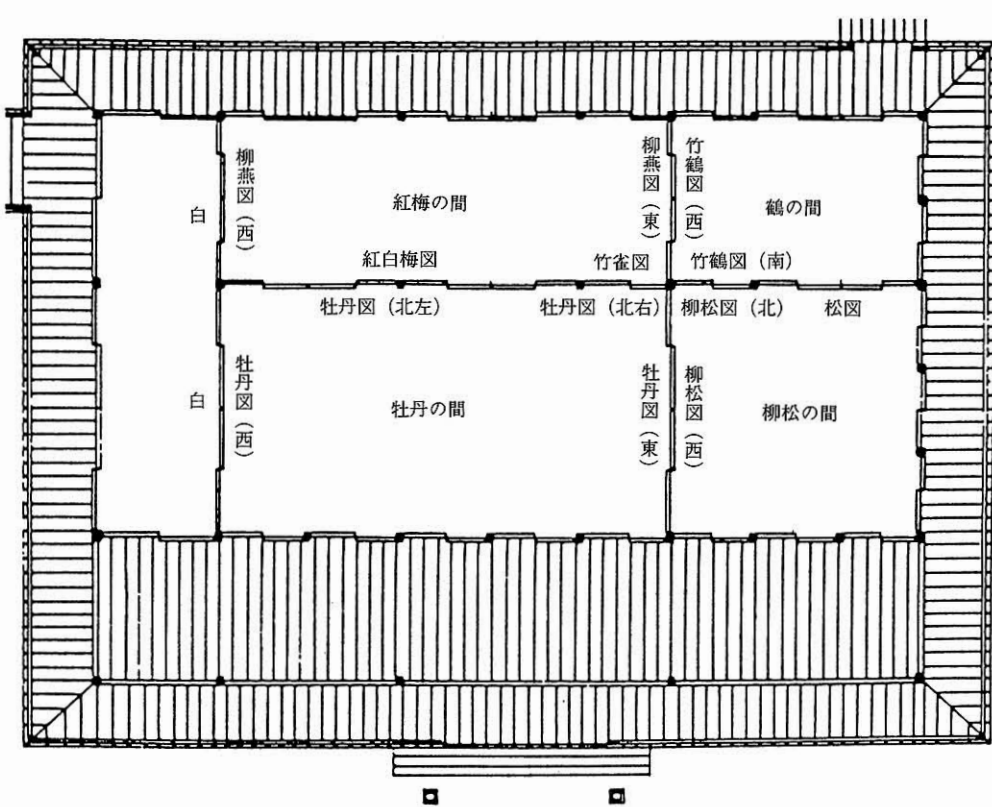
大覚寺宸殿は、寺伝では東福門院旧殿(將軍秀忠の女和子が御水尾



(正寝殿)

天皇の女御として入内するのに先立ち造営か、あるいは紫宸殿が下賜されたと伝え、貞享三年(一六八六)に同寺に移築されたとするが、根拠となる史料は明かでない。²⁾

藤岡通夫氏は、①大覚寺宸殿平面構成が内裏指図より知れる東福

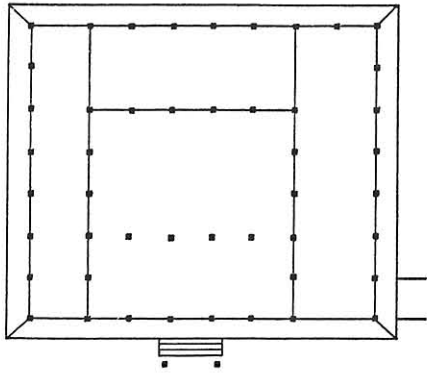


(宸殿)

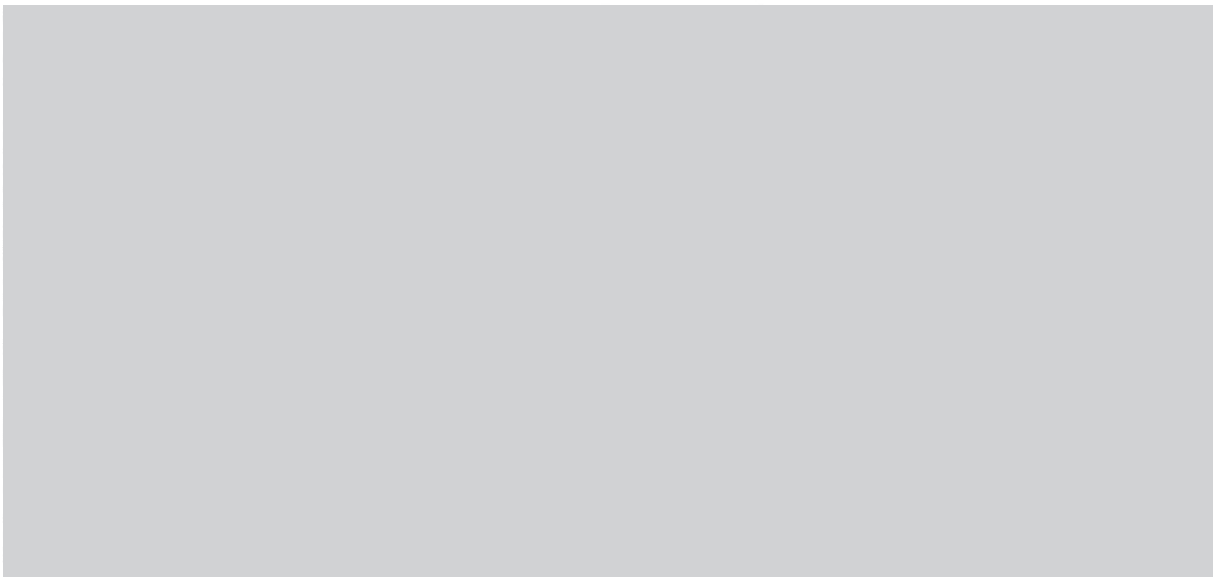
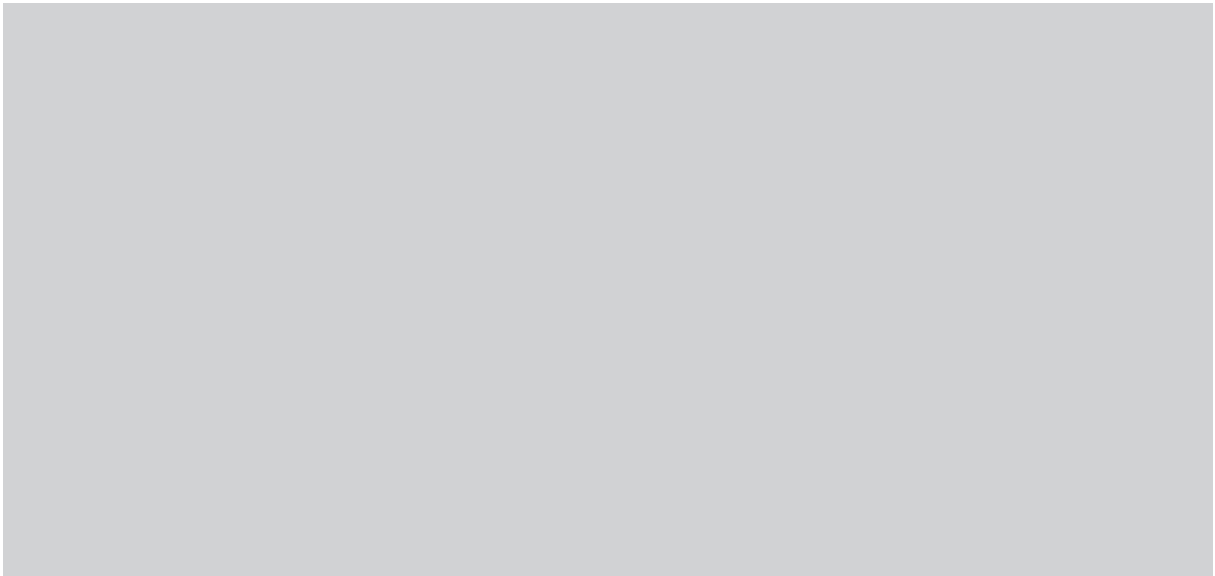
挿図1 正寝殿・宸殿障壁画配置図

門院御所宸殿（挿図2）に最も近いこと、
 ②襖引手に葵紋をもつこと、③柱間が書
 院造り一般の寸法と異なることなどの点
 から、元和五年（一六一九）造営の東福門
 院御所の宸殿が、寛永度内裏造営時に明
 正天皇の常御殿に改造、やがて大覚寺に
 移されたと結論づけた。襖絵に関しては、
 柱間が七尺余と特殊で、他の襖では寸法
 が合わないので、襖も建物と共に下賜さ
 れたとした。^③

絵画史では、土居次義氏が詳細な検討
 を行い、「紅白梅図」と「牡丹図」北側八
 面（挿図3）を狩野山楽筆とし、「柳松図」
 「柳燕図」「竹雀図」などを山楽と同時代の



挿図2 東福門院宸殿平面図（藤岡、1956）



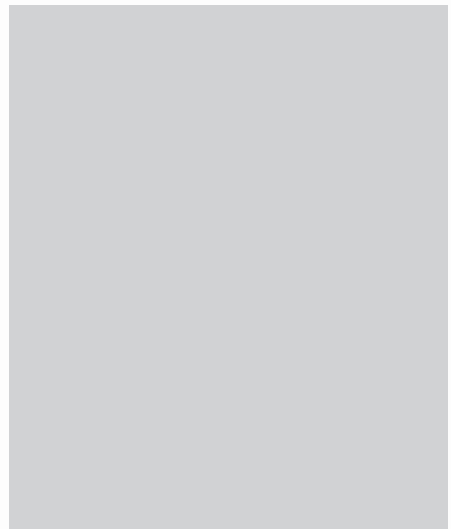
挿図3 紅白梅図、牡丹図

近い関係にある画家の作品であると論じた（この作者比定見解は、以後の諸氏、諸論中でも大きな異動はない）。またその成立は、上の藤岡説を受けて、山樂が元和年間の東福門院御所造営に参加した時のものであるとした。ただし様式の上では、「牡丹図」や「紅白梅図」は慶長様式の範疇に入り、山樂の元和様式は慶長様式の中に包含されると述べた⁴⁾。これら「元和五年成立説」は、半ば定説化しつつあるよう⁵⁾で、最近の木村重圭氏の論説まで基本的に藤岡説に従っている⁶⁾。

ところが、川本桂子氏は、近著でこれに対する根本的な疑問を提出した⁶⁾。すなわち、①東福門院宸殿と大覚寺宸殿はプランに規模その他かなりの相違があること、②東福門院御所は四度営まれていて宸殿が元和度のもとの限らないこと、③元和度東福門院御所の確実な遺構である円満院の引手（挿図4）は菊紋がつくことなどを挙げ、藤岡説は成立せず、少なくとも障壁画については純粋に絵画の様式から判断すべきことを主張した⁷⁾。さらに、山樂の画風が元和元年（一六一五）大坂城落城以後大きく変化するとし、宸殿の牡丹図や紅白梅図はそれ以前、すなわち慶長十五年から末年ころと結論づけた。

なお狩野博幸氏は、「牡丹図」十八面のうち正面八面とそれ以外の十面の画風の違いについて言及し、これを同時期の大画面制作による仕事分担から生じたとする一般見解に疑問を呈し、制作の時間差を暗に示唆した⁸⁾。

如上のように、宸殿障壁画の成立年代に関し、建築年代の上限に依拠する藤岡氏の「通説」と、絵画そのものの様式年代を主張するとくに川本氏の見解に大きな食い違いがある。またそこでは、両氏の論拠の一部に引手の文様意匠が含まれていることが注意される。



挿図4 旧円満院宸殿襖絵引手

イ 正寝殿

正寝殿は、主室「御冠の間」で南北朝講和が成ったとの寺伝があるくらいで、正確な築造時期の判る史料はない。しかも建物及び障壁画の後世の改修痕跡が著しく、諸説入り交じって、宸殿以上に複雑な様相を呈している。

中村昌生氏は、建築史の立場から創建を慶長期とし、帳台構以下三室が続く対面所形式プランは御所の慶長度造営常御殿の模倣と考えた。また、「大覚門主以予樂先君河東亭子以之崧山」（九峰自瑞筆「東林稿」・陽明文庫）の記事から、近衛家予樂院の末子で十二歳で大覚寺に入室した寛深（一七二四〜八七）代に、近衛家別邸を移建したか、あるいは元の建物に加えて改修したものと考えた。これには、正寝殿障壁画中に近衛家に仕えた渡辺始興（一六六三〜一七五五）の絵が加わっていることが傍証となっている⁹⁾。

大森健二氏も、建築の諸特徴から正寝殿の創建を桃山時代とした。さらに、こちらの襖引手にも三つ葉葵の東福門院関係のものが使用

されることから、寛永末年ころ宸殿移建工事に伴って、現在のごとくに建物や障壁画が改造されたという注目すべき見解を提出した。これは、正寝殿が当初から大覚寺で建造されたという前提に立つものである。¹⁰⁾

さて正寝殿の障壁画については改装痕著しいものが多く、まずどこまでが創建建物に伴うかが問題となる。土居次義氏は、水墨の「山水図」「松鷹図」(挿図5)、金碧の「桃竹図」「紅葉図」を山楽筆、雪の間の「雪景山水図」や腰障子絵を始興筆とした(この作者比定も以後の大方の見解と異動ない)。その上で、正寝殿建物の伝来に慎重な立場を取りつつも、建物と「緊密な関係」を示す水墨「山水図」「松鷹図」は、「必ずや正寝殿のための装飾画として」制作されたとし、これらは山楽の慶長様式を示すと主張した。¹¹⁾

川本桂子氏も、とくに「松鷹図」を改装なしという前提でその画面構成と樹表現を分析し、「永徳の没後まもない時期、文禄年間あるいは慶長初年ごろの作品」と考えた。ここで、『御湯殿上日記』慶長三年二月二十三日条の「大かく寺御てんたてられ候。御かうりよくとてしろかね百枚まいらせ候。とくぜんいん(徳善院前田玄以)きもいりにててんそうとりいたして御わたしあり。」の記事を引き、この時の作事と「松鷹図」の様式年代との一致を示唆しているのが注意される。¹²⁾

狩野博幸氏は、川本氏の見解を大方で支持し、「山水図」は「ややこなれていない表現がうかがえる」ので、「桃竹図」「牡丹図」「紅白梅図」など金碧画よりも早い時期の制作と論じた。しかし「山水図」「松鷹図」が、「それらとは別の建物から運ばれた」として、正寝殿当初のものと考えていない点で、土居氏らの見解と異なる。¹³⁾

挿図5 山水図、松鷹図

以上、水墨画二作品の検討を主眼とする諸論と異なり、木村重圭氏は、建物と障壁画の付属関係について重要な指摘を行っている。同氏は、大覚寺全体の障壁画を、山楽一派の桃山様式作品と渡辺始興の作品の二群としてとらえた。そこで始興のものに改装痕が全く見られないことを根拠に、まず山楽一派の障壁画を伴った建物が大覚寺にあり、近衛予楽院の子、寛深が入寺後に、山楽一派の作品を様々に改装して活用し、不足する分を始興に描かせたとした。さらに、大覚寺に残る山楽一派の作品が、東福門院女御御所から移建したとされる宸殿にのみ伴う作品群としては多すぎることから、正寝殿も同時に東福門院旧殿を移してきたのではないかと考えた¹⁴⁾。

以上、冗長を省みず各説をトレースしてきた。山楽あるいはその一派の障壁画群を「桃山様式」または「慶長様式」と捉える点や、正寝殿の上限を慶長期とする点、十八世紀前半の寛深門主時代に大改装があったという点では、見解は概ね一致している。ところが、建物・障壁画の本来的な付属関係や、個々の成立年代、大覚寺への移建状況については、とくに宸殿前身建物の問題を主軸として見解が大きく異なっており、全ての状況を総合的に説明する見解は未だ存在しないといえる。これらの問題を解決する一手段として、以下、引手金具の分析を行う。

二 引手の分類と型式組列

障壁画の調査に工芸史の立場からの参加は通常ほぼ皆無で、当然のことながら引手金具に関する調査研究もあまり見られない。重要

文化財建造物の修理報告に際しても、引手の解説や拡大写真が掲載されることは稀である¹⁵⁾。そのような中で、桂離宮御殿解体修理に伴う調査が各分野の研究者の参加を得て行われ、引手に関しては、河田貞氏が詳細な分類を行い、員数、設置箇所等を報告しているのが特筆される¹⁶⁾。小稿で用いる引手の部分名称等は、原則として河田氏論考によった。

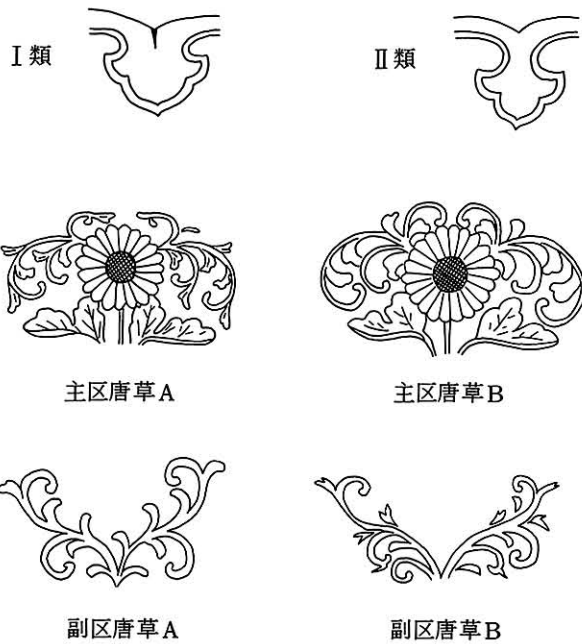
大覚寺障壁画の引手は、杉戸絵に伴うものや、襖絵に伴うもののうち明らかに後出のものを除くと、大半が形態・文様意匠を同じくする、すなわち同一形式のものである。小稿で検討対象とするのは、この形式のみに限る。楕円形の「手掛かり」と鐺状の「縁座」が組み合わせり、間に「小座」と呼ぶ飾環と外周小刻みを施す座金からなる(図版5・6)。

縁座は木瓜形とも称されるもので、連弧状の間弁を有する四弁花形を呈する。文様区画の内、主弁部を主区、間弁部を副区と呼ぶ。総体に銅板鍛造鍍金、主区は菊唐草文を、副区は唐草文を線刻して、地は全面魚々子地とする。区画線の両側は一〜三列に魚々子を打つ。次に手掛かりは、銅細板の胴部に楕円形底板が爪により取り付けられる構造で、後者は銅板鍍金、七宝形区画の中央に三つ葉葵文を置き、四方に三葉文を付して、周囲の四区画にはS字形の唐草文を配する。地は全面魚々子地とする。小座は断面が四分の一円形で、表面に七宝文が充填される。

これらの各部位から構成される引手は、とくに縁座文様の細部の特徴から、以下の指標に基づき分類できる(挿図6、図版19―1―4、表1)。

【大分類】

- 1 副区の唐草文
 - A群……濃紺色に着色する。
 - B群……無着色。
- 2 副区の出八双文
 - I類……根元の股部に鏝を打つもので、頸部は相対的に太い。
 - II類……根元の股部に鏝を打たないもので、頸部は相対的に細い。
- 3 主区の唐草文
 - (A) 葉を内外両方に展開させる。
 - (B) 葉が内側のみに巻き込む。
- 4 副区の唐草文



挿図6 型式分類の指標

(A) 根元で二又に展開する。

(B) 根元で二又に展開する草の下方で、もう一〜二本の草が短く展開する。

右記3、4の唐草の組み合わせが四種ある。

- a類……主区唐草A+副区唐草A
- b類……主区唐草B+副区唐草A
- c類……主区唐草A+副区唐草B
- d類……主区唐草B+副区唐草B

【中分類】

大分類で「A群Ia」などと表現される各まとまりは、さらに構図細部の違いにより1、2、3……と細分される。なおA群の一部に通有のものより一回り大型品が見られ、これには、を付す。

【小分類】

右でグルーピングされた同一構図の引手にも、菊や葉などの表現の精粗が見られる。精緻なものから粗雑なものへ、相対的差を識別できたものを、ア、イ、ウ……とした。

以上のように分類された引手のまとまりを小稿では「型式」と呼ぶ。ここでいう「型式」は主に考古学で用いられる概念で、工芸史(あるいは美術史)では馴染みが薄い。¹⁸⁾ 小稿では、時間および製作レベルの共通性を示す概念としてこの用語を用いる。

例えば、個数の最も多いA群Ib2イ型式は、山水図、桃竹図、竹図と雪景山水図に計九個確認される。菊花文は、菊花に葉が少し

表1 引手の型式別計測値一覧

群	型式	段階	縦	横	手掛長径	手掛短径	手掛深	全高	縁座高	魚ヶ子(個/mm)	建物	図名称	番号	図版
A	(I b2)		11.9	10.9	5.7	4.3	1.5	0.8	0.4	1.5~2	正寝殿	雪景山水図(西)	01	
A	(I b2)		11.9	11.1	5.8	4.2	1.5	0.8	0.4	2~2.5	正寝殿	雪景山水図(西)	04	
A	(I b2)		12.1	11.0	5.6	4.2	1.5	0.8	0.4	2~2.5	正寝殿	雪景山水図(西)	05	19-5
A	I a1	1-1	11.7	10.5	5.5	4.2	1.5	1.0	0.4	2.5~3	正寝殿	雪景山水図(西)	02	19-1
A	I a1'ア	1-1	12.6	11.2	5.6	4.2	1.5	0.9	0.4	2.5~3	正寝殿	松鷹図(西)	12	19-1
A	I a1'イ	1-2	12.7	11.1	5.4	4.2	1.5	0.9	0.5	2~2.5	正寝殿	立木図	04	19-1
A	I a2ア	2	11.8	10.8	5.7	4.3	1.5	1.0	0.5	2~2.5	正寝殿	雪景山水図(東)	11	19-1
A	I a2ア	2	11.8	10.6	5.7	4.4	1.5	1.0	0.5	2~2.5	正寝殿	桃竹図(竹西)	03	
A	I a2イ	2	11.9	10.8	5.8	4.5	1.8	0.9	0.4	2~2.5	正寝殿	桃竹図(竹西)	04	19-1
A	I a2イ	2	11.8	10.8	5.7	4.3	1.5	1.0	0.5	2~2.5	正寝殿	桃竹図(竹北)	07	
A	I a2イ	2	11.8	10.8	5.6	4.4	1.5	0.8	0.4	2~2.5	正寝殿	竹図	02	
A	I b1	1-2	11.8	10.7	5.9	4.2	1.4	1.0	0.5	2.5~3	正寝殿	松鷹図(東)	02	19-1
A	I b1	1-2	12.0	10.9	5.5	4.3	1.5	1.2	0.5	2~2.5	正寝殿	山水図(南)	04	
A	I b1	1-2	11.9	10.9	5.5	4.4	1.4	0.6	0.3	2.5~3	正寝殿	立木図	02	
A	I b1	1-2	12.0	10.8	5.7	4.5	1.5	0.8	0.4	2~2.5	正寝殿	桃竹図(竹西)	05	5
A	I b1'ア	1-1	12.8	11.3	5.8	4.2	1.5	1.0	0.4	2.5~3	正寝殿	松鷹図(西)	10	19-1
A	I b1'イ	1-2	12.5	11.0	5.6	4.2	1.5	1.0	0.4	2.5~3	正寝殿	松鷹図(西)	09	19-1
A	I b2ア	1-1	11.9	10.7	5.5	4.3	1.5	0.7	0.3	2.5~3	正寝殿	立木図	01	19-1
A	I b2イ	1-2	12.0	10.9	5.6	4.4	1.5	0.8	0.3	2~2.5	正寝殿	山水図(南)	05	
A	I b2イ	1-2	12.0	10.9	5.5	4.2	1.5	0.9	0.4	2~2.5	正寝殿	山水図(南)	06	19-1
A	I b2イ	1-2	11.8	10.6	5.9	4.4	1.4	1.0	0.5	2~2.5	正寝殿	雪景山水図(西)	03	
A	I b2イ	1-2	11.7	10.9	5.4	4.1	1.5	1.0	0.4	2~2.5	正寝殿	雪景山水図(西)	06	
A	I b2イ	1-2	12.0	10.8	5.7	4.3	1.4	1.0	0.5	2.5~3	正寝殿	雪景山水図(南)	07	
A	I b2イ	1-2	11.9	10.9	5.7	4.2	1.5	0.8	0.4	2.5~3	正寝殿	雪景山水図(南)	09	挿7
A	I b2イ	1-2	12.1	10.9	5.8	4.3	1.5	0.9	0.5	2.5~3	正寝殿	雪景山水図(南)	10	
A	I b2イ	1-2	12.0	10.8	5.7	4.4	1.5	0.8	0.4	2~2.5	正寝殿	桃竹図(竹北)	08	
A	I b2イ	1-2	12.0	10.9	5.7	4.4	1.5	0.6	0.3	2~2.5	正寝殿	竹図	01	
A	I b2ウ	1-2	12.0	10.8	5.7	4.4	1.5	0.8	0.5	2~2.5	正寝殿	紅葉図	02	
A	I b2ウ	1-2	11.8	10.9	5.5	4.3	1.4	0.9	0.4	2~2.5	正寝殿	紅葉図	03	19-1
A	I c1ア	1-1	11.7	10.2	5.7	4.3	1.6	1.1	0.5	2.5~3	正寝殿	紅葉図	01	19-1
A	I c1イ	1-1	11.7	10.3	5.7	4.3	1.5	1.1	0.5	2~2.5	正寝殿	雪景山水図(東)	12	19-1
A	I c2	1-1	11.7	10.7	5.7	4.3	1.5	0.8	0.4	3~3.5	正寝殿	松鷹図(北)	07	
A	I c2	1-1	11.4	10.3	5.8	4.4	1.7	1.1	0.6	2.5~3.5	正寝殿	山水図(西)	01	19-1
A	I d1	1-1	11.9	10.8	5.8	4.5	1.5	0.9	0.5	3~3.5	正寝殿	松鷹図(東)	03	
A	I d1	1-1	11.8	10.7	5.7	4.2	1.7	1.2	0.5	2.5~3	正寝殿	雪景山水図(東)	13	
A	I d1	1-1	11.6	10.5	5.8	4.4	1.9	1.3	0.5	3~3.5	正寝殿	紅葉図	04	19-1
A	I d2	2	12.0	10.8	5.7	4.3	1.5	1.0	0.4	2~2.5	正寝殿	雪景山水図(南)	08	19-2
A	II a1	2	11.8	10.7	5.7	4.3	1.7	1.0	0.5	2.5~3	正寝殿	桃竹図(紅葉西)	01	19-2
A	II a2	2	11.7	10.7	5.7	3.9	1.5	1.0	0.4	2~2.5	宸殿	紅白梅図	02	
A	II a2	2	11.6	10.5	5.7	4.2	1.4	1.0	0.5	2~2.5	正寝殿	松鷹図(北)	05	
A	II a2	2	11.6	10.6	5.7	4.4	1.6	1.1	0.6	2~2.5	正寝殿	山水図(西)	02	19-2
A	II b	2	12.0	10.7	5.8	4.3	1.5	0.8	0.3	3~3.5	正寝殿	松鷹図(北)	06	19-2
A	II cア	1-1	11.5	10.3	5.7	4.3	1.6	1.0	0.5	2.5~3	正寝殿	桃竹図(紅葉西)	02	19-2
A	II cイ	2	12.4	11.2	5.8	4.3	1.9	1.1	0.4	3~3.5	正寝殿	松鷹図(東)	01	
A	II cイ	2	12.0	10.7	5.7	4.4	1.7	1.2	0.6	3~3.5	正寝殿	山水図(南)	03	19-2
A	II cイ	2	12.2	11.0	6.0	4.3	1.6	0.8	0.4	2.5~3	正寝殿	立木図	03	
A	II cイ	2	12.0	10.9	5.7	4.3	1.5	1.2	0.6	2.5~3.5	正寝殿	桃竹図(竹西)	06	
A	II cウ	2	11.9	10.8	5.9	4.4	1.7	1.0	0.4	3~3.5	正寝殿	松鷹図(北)	08	19-2
B	I a1ア	1-1	11.7	10.7	5.6	4.3	1.5	0.9	0.4	2.5~3	宸殿	白(牡丹西)	03	19-2
B	I a1イ	1-1	11.7	10.6	5.8	4.4	1.9	1.1	0.5	2.5~3	宸殿	松図	04	19-2
B	I a2ア	2	11.7	10.5	5.7	4.4	1.7	0.8	0.4	2.5~3	宸殿	白(柳燕裏)	02	19-2
B	I a2イ	2	11.7	10.5	5.7	4.4	1.8	0.9	0.5	2.5~3	宸殿	牡丹図(北右)	01	19-2
B	I a2イ	2	11.6	10.5	5.7	4.4	1.9	1.0	0.5	2.5~3	宸殿	牡丹図(北右)	02	
B	I a2イ	2	11.6	10.6	5.9	4.4	1.6	0.8	0.4	2.5~3	宸殿	鶴図	01	
B	I b1	1-2	11.9	10.7	5.7	4.2	2.0	1.0	0.4	2~2.5	宸殿	白(柳燕裏)	03	19-2
B	I b2ア	1-1	11.7	10.7	5.5	4.3	1.4	0.8	0.4	2.5~3	正寝殿	松鷹図(西)	11	19-2
B	I b2イ	1-2	11.9	10.8	5.7	4.3	1.8	0.9	0.4	2.5~3	宸殿	牡丹図(北左)	01	19-2

群	型式	段階	縦	横	手掛長径	手掛短径	手掛深	全高	縁座高	魚々子(個/mm)	建物	図名称	番号	図版
B	Ic1ア	1-1	11.8	10.4	5.8	4.2	1.9	1.1	0.5	2.5~3	宸殿	牡丹図(北左)	07	19-2
B	Ic1ア	1-1	11.6	10.6	5.6	4.2	2.0	1.4	0.6	2.5~3	宸殿	柳燕図(東)	02	
B	Ic1ア	1-1	11.6	10.3	5.7	4.4	1.9	1.2	0.6	3~3.5	宸殿	柳燕図(東)	04	19-3
B	Ic1ア	1-1	11.6	10.4	5.7	4.4	1.9	1.0	0.4	3~3.5	宸殿	柳燕図(西)	04	
B	Ic1イ	1-1	11.7	10.8	5.6	4.3	1.9	1.0	0.5	2.5~3	宸殿	牡丹図(北左)	03	
B	Ic1イ	1-1	11.7	10.7	5.8	4.4	1.9	1.0	0.4	2.5~3	宸殿	牡丹図(北左)	05	
B	Ic1イ	1-1	12.0	10.6	5.9	4.4	1.7	1.1	0.5	3~3.5	宸殿	牡丹図(西)	01	
B	Ic1イ	1-1	11.7	10.7	5.8	4.4	1.8	1.0	0.4	2.5~3	宸殿	紅白梅図	04	
B	Ic1イ	1-1	11.8	10.6	5.4	4.3	1.5	1.1	0.5	3~3.5	宸殿	竹雀図	02	
B	Ic1イ	1-1	11.7	10.5	5.7	4.4	1.7	1.0	0.5	2~2.5	宸殿	鶴図	02	
B	Ic1イ	1-1	11.5	10.7	5.7	4.2	1.8	1.1	0.7	2.5~3	宸殿	白(柳燕裏)	01	
B	Ic2ア	1-1	11.7	10.4	5.7	4.4	1.9	1.2	0.5	2.5~3	宸殿	牡丹図(北左)	06	19-3
B	Ic2ア	1-1	11.7	10.4	5.8	4.3	1.8	1.0	0.4	2.5~3	宸殿	紅白梅図	06	
B	Ic2ア	1-1	11.6	10.2	5.7	4.4	1.9	1.0	0.5	2~2.5	宸殿	柳松図(北)	02	19-3
B	Ic2ア	1-1	11.7	10.4	5.8	4.4	1.7	1.0	0.5	2~2.5	宸殿	柳松図(西)	03	
B	Ic2ア	1-1	11.5	10.6	5.6	4.2	1.5	1.1	0.5	2.5~3	宸殿	白(牡丹西)	01	
B	Ic2イ	2	11.8	10.7	5.7	4.4	1.8	1.1	0.6	2.5~3	宸殿	柳燕図(西)	01	
B	Ic2イ	2	11.9	10.7	6.0	4.5	1.7	1.3	0.7	1.5~2	宸殿	白(牡丹西)	02	
B	Ic3ア	1-1	11.5	10.5	5.8	4.4	1.6	1.0	0.5	2.5~3	宸殿	竹鶴図(南)	05	
B	Ic3ア	1-1	11.7	10.6	5.8	4.4	1.7	1.3	0.6	2.5~3	宸殿	柳松図(西)	06	
B	Ic3イ	1-2	11.7	10.2	5.7	4.3	1.6	1.0	0.5	2.5~3	宸殿	牡丹図(西)	02	
B	Id1ア	1-1	11.8	10.7	5.5	4.2	1.7	1.0	0.5	2.5~3	宸殿	紅白梅図	07	19-3
B	Id1ア	1-1	11.7	10.5	5.5	4.2	1.5	1.3	0.6	2~2.5	宸殿	柳松図(西)	05	
B	Id1イ	1-2	11.8	10.7	5.9	4.6	1.7	1.1	0.5	2.5~3	宸殿	牡丹図(北左)	02	19-3
B	Id1イ	1-2	11.8	10.8	5.6	4.1	1.7	1.2	0.5	2.5~3	宸殿	牡丹図(西)	03	
B	Id1イ	1-2	11.8	10.5	5.9	4.5	1.5	1.4	0.7	2~2.5	宸殿	柳燕図(東)	03	
B	Id1ウ	2	11.8	10.5	5.6	4.1	1.5	1.2	0.5	2.5~3	宸殿	白(牡丹西)	04	
B	Id1エ	2	11.8	10.5	5.7	4.2	2.0	1.3	0.7	3~3.5	宸殿	柳燕図(東)	01	
B	Id1エ	2	11.7	10.5	5.7	4.3	1.6	1.3	0.6	3~3.5	宸殿	竹鶴図(西)	03	
B	Id1エ	2	11.7	10.7	5.7	4.3	1.9	1.3	0.6	2.5~3	宸殿	竹鶴図(西)	04	
B	Id2	1-2	11.8	10.6	5.6	4.2	1.8	1.3	0.6	2~2.5	宸殿	牡丹図(西)	04	
B	Id2	1-2	11.9	10.7	5.5	4.1	1.5	1.3	0.6	2~2.5	宸殿	紅白梅図	05	19-3
B	Id2	1-2	11.9	10.6	5.7	4.4	1.7	1.2	0.6	2.5~3	宸殿	柳燕図(西)	03	
B	Id2	1-2	11.6	10.7	5.5	4.2	1.4	1.1	0.5	2~2.5	宸殿	柳松図(西)	04	
B	Id3	2	11.8	10.5	5.9	4.3	1.6	0.9	0.5	2.5~3	宸殿	牡丹図(東)	01	19-3
B	Id3	2	11.8	10.3	5.6	4.3	1.5	0.8	0.4	2.5~3	宸殿	牡丹図(北左)	04	
B	Id3	2	11.6	10.3	5.8	4.5	1.8	1.0	0.5	2~2.5	宸殿	紅白梅図	01	
B	Id3	2	11.5	10.2	5.8	4.3	1.6	1.1	0.5	2~2.5	宸殿	竹雀図	01	
B	Id3	2	11.7	10.4	5.7	4.4	1.8	1.3	0.6	2~2.5	宸殿	竹鶴図(南)	06	
B	Iiaア	1-1	11.9	10.6	6.0	4.4	1.8	1.3	0.5	2~2.5	宸殿	牡丹図(東)	02	19-3
B	Iiaア	1-1	11.8	10.5	5.8	4.4	1.7	1.1	0.5	2~2.5	宸殿	牡丹図(東)	03	
B	Iiaア	1-1	11.8	10.7	5.8	4.5	1.8	1.2	0.5	2.5~3	宸殿	牡丹図(北左)	08	
B	Iiaイ	1-2	11.6	10.4	5.7	4.4	1.5	1.0	0.5	2~2.5	宸殿	松図	03	
B	Iib	1-2	11.8	10.6	5.9	4.5	1.6	1.2	0.5	2.5~3	宸殿	牡丹図(東)	04	19-3
B	Iicア	1-1	11.4	10.4	5.8	4.4	1.5	0.9	0.4	2~2.5	宸殿	松図	02	19-3
B	Iicイ	2	11.7	10.4	5.7	4.3	1.8	1.1	0.5	2.5~3	宸殿	紅白梅図	03	
B	Iicイ	2	11.8	10.6	5.7	4.5	1.5	1.0	0.5	3~3.5	宸殿	竹鶴図(西)	02	19-4
B	Iicウ	2	11.9	10.7	5.7	4.5	1.7	1.1	0.5	2.5~3	宸殿	紅白梅図	08	
B	Iicウ	2	11.7	10.5	5.8	4.2	1.8	0.9	0.5	2~2.5	宸殿	柳燕図(西)	02	
B	Iid	2	11.7	10.5	5.5	4.2	1.5	1.3	0.6	2.5~3	宸殿	柳松図(北)	01	19-4
C			12.4	10.9	5.5	4.0	1.2	0.8	0.5	1.5~2	宸殿	竹鶴図(西)	01	19-5
D			12.0	10.6	5.6	4.1	1.3	0.6	0.3	1	正寢殿	雪景山水図(東)	14	19-5
E			8.5	7.3	4.8	3.5	1.2	0.7	0.3	1~1.5	正寢殿	白(山水間)	01	19-5
E			8.4	7.0	5.0	3.3	1.3	0.7	0.3	1~1.5	正寢殿	白(山水間)	02	
E			8.6	7.2	4.9	3.3	1.1	0.8	0.5	1~1.5	正寢殿	白(山水間)	03	
E			8.7	6.2	4.7	3.4	1.2	0.6	0.3	1~1.5	正寢殿	白(山水間)	04	

注 ・() を付した型式は、下の時期の模倣型式であることを示す。

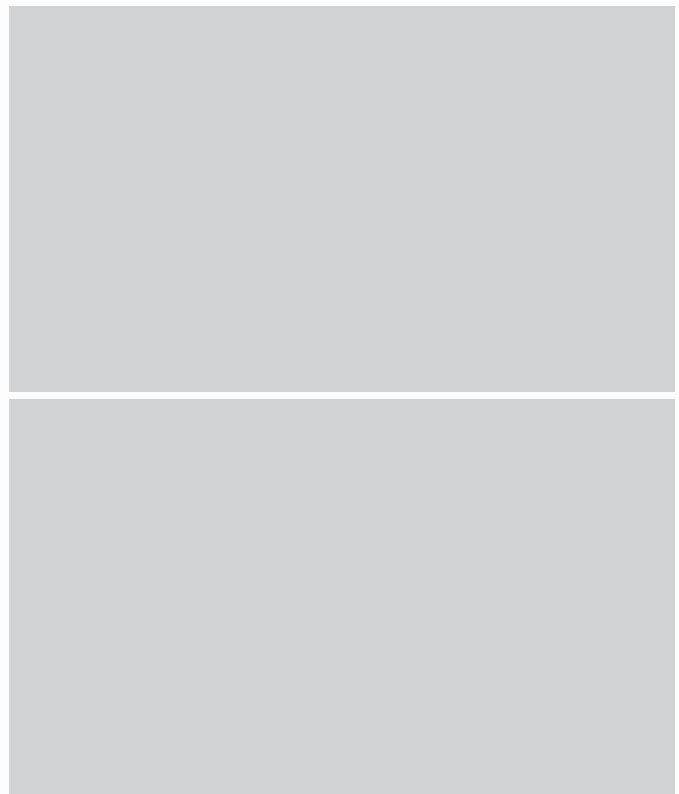
・長さの単位は、cmである。

かかり、茎が二重線で表現されるのが特徴で、さらに葉の形状や葉脈表現、唐草文表現など、構図、鑿彫のタッチまで共通する。また主区・副区の形状や割付も、左右バランスの歪み方に至るまで同じである(挿図7)。したがって、この最小単位の型式は、同一の工人がおそらくは同一型紙、原図による製作を行ったものであることを意味している。ただし同一型式の中でも、唐草文に余計な小葉を一枚だけ加えたり、各文様の位置関係が部分的にずれていたりする。これは、同一原図によりながらも、百パーセントその通りに彫ったとは限らないことを示している。

次に、これをI b 2型式のA、Uと比較すると(図版19―1参照)、Aは構図は細部まで同じであるが、葉や草の表現が格段にシャープであることがわかる。これは工人の違いによる可能性が大きい。またUは、鑿彫のタッチや基本構図は同じであるが、菊葉表現がやや簡略で、主区・副区の区画形状も微妙に違っている。これは、原図の差によるものか、工人の差、あるいは微妙な時間差によるものか、判別は難しい。

このように小分類レベルの差異は、原図・工人・時間の三要素により生ずるものである。彫金における文様表現の変化を、とりあえず「省略化」、「形式化」の観点で捉えるならば、型式組列はA↓I↓Uの関係となるが、これが上の三要素のどれを反映するかは、一様ではなく、結果として峻別は困難である。

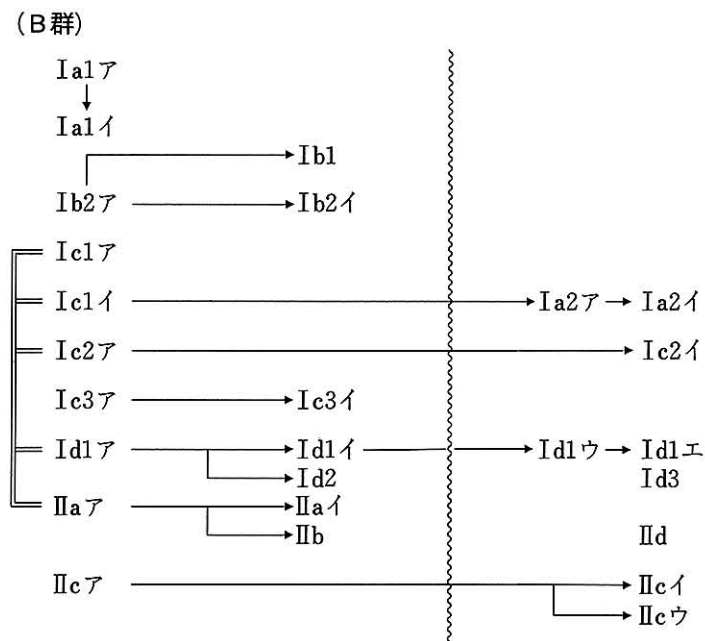
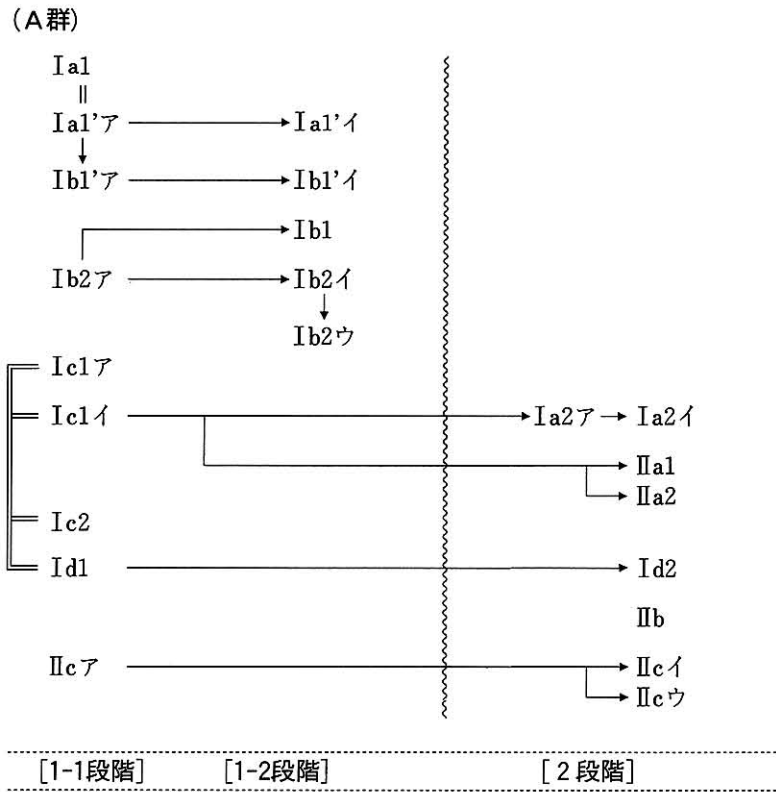
以上のような考えのもとに、構図(大分類・中分類)を同じくする系列の型式変化をたどり、さらに文様細部の表現法や鑿彫タッチなどの親縁関係により判断して、挿図8のような型式間組列を想定した。



挿図7 A群I b 2イ類の例
上：山水図06、下：雪景山水図09

中分類レベルでは、各々の系列が影響関係にあつて構図細部の変化を生ずることもあるが(例えばI b 2 A↓I b 1の変化)、基本的には、同一構図の枠組みの中でまとまる。また異種構図間でも、示した型式同士は、文様表現やタッチが酷似していて、同一工人による可能性も十分に考えられる。

さて、工人レベルの議論は後節で改めて述べるとして、襖絵との関わりで当面重要なのは、各型式の時間的な位置関係である。前述I b 2などの型式変化は、文様形式と技法様態から見ても、仮に時間差であったとしてもそれは微妙な時間差で、世代を違えるような大きな差ではない。おおむね同じ段階の製品と見なしてもよいであろう。



挿図8 引手の型式組列

ところが、上の同じ段階の型式変化に比べると格段に大きなギャップを持つものも一定数存在する。例えば図版19のIIcア型式は、同一構図ながらイ、ウ類に至って、文様バランスや菊葉表現などが大きく崩れてしまう。このような場合、ア→イ・ウの変化には、前段Ib2型式とは違い、ある程度の時間差を想定せざるをえない。かかる型式群は、主区唐草の先端巻込みの珠粒化、副区唐草文表現の煩雑化もしくは萎縮化、副区出入八相文の変形、などといった現象が見られるものがある。さらに文様だけではなく、魚々子も粗雑なものや密度の粗いものが目立ち、前段階との「時間差」の蓋然性を高めている。

おしなべて言えば、この段階には副区出入八相文に鑿を打たないII類が多く、またc、d類が多い傾向がうかがえる。しかし、これらは前段階で始まり新段階まで展開するもので、編年論的には独立した後出性の指標とならないことが注意される。

組列では右に見た前後の段階を「1段階」「2段階」とした。段階内の型式変化の前後差は、時間差のみとは必ずしも言えないが、とりあえず「1-1段階」などと表記する。

三 引手の型式存否から見た

障壁画群の成立経緯

本節では、前述のような組列の考えられる引手各型式が障壁画群のどこに、どのような組合せで装着されているか、すなわち「存否パターン」に着目し、障壁画の成立、改装に関わる諸問題について考えていく。

ア、A群・B群の存否

表2は、宸殿と正寝殿の障壁画に現時点で装着されている引手型式の一覧である。第一に、A群、B群が正寝殿と宸殿とに明確に対応することに気付く。さらに重要なのは、表3のように、当初段階のいくつかの型式がA・B両群間で全く同じ特徴を示す対応関係にあって、型式組列の流れも(挿図8参照)ほぼ同様な傾向を示すという点である。これらから、次のことが判明する。

- ・正寝殿と宸殿の引手は、統一されたデザインで、配色のみを違えるという明確な意図のもとに計画された。
- ・引手の製作は、同時に、しかも同一の金具工房(あるいは工人集団)によって行われた。

・引手が製作されてから以後、両建物間における引手の移動はほとんどない。

以上から、正寝殿・宸殿両建物の障壁画群は、別々の経過を経て現状に至ったのではなく、ある時点でほぼ同時に現在のよう・な・状態に整えられたことが明らかとなる。問題は、それがどの時期に行われたかであるが、当面三つの場合を想定しうる。

想定(1) 狩野山樂らが障壁画を制作した慶長・元和年間ころ。……この場合、現引手は襖絵に当初から付属したものであることになる。また、宸殿「紅白梅図」や「牡丹図」、正寝殿「山水図」や「松鷹図」が、狩野氏以外の諸氏の言うように、建物オリジナル作品であるならば、正寝殿・宸殿の前身建物は同じ場所にあった(あるいはきわめて密接な関係にあった)といえ、別々の所からの移建説は否定される。想定(2) 寛永年間以降、宸殿(あるいは正寝殿)が某所から大覚寺に移建されたとき。……この場合、桃山期襖絵に付属する現引手は

全てが後補ということになる。

想定(3) 十八世紀前半、寛深大僧正の大改修のとき。……この場合も、桃山期襖絵に付属する現引手は全てが後補で、渡辺始興の襖絵の引手がオリジナルということになる。

これら三つの想定の当否は、①引手そのものの年代観、は当然として、②新旧引手の遺存状況や付替え痕跡などから帰納される襖絵の改装・追加経緯、③引手の文様モチーフ、などの諸点が整合的に説明できるかどうか判断の条件となろう。以下では、まず②から検討する。

イ、1段階・2段階型式の存否

前節で検討したように、引手の型式変化中の大きなギャップを時間差と考へ、これらを新旧の二段階と捉えることができる。図ごとの引手の段階を見ると(表2)、次のように1段階の引手が主体を占めるものと、2段階の引手が主体を占めるものに色分けできる。

1段階：正寢殿／松鷹図(東・西面)、山水図、雪景山水図、紅葉図、

立木図。

宸殿／牡丹図(北面左・西面)、紅白梅図²⁰⁾、柳燕図(東面)、

松図、柳松図。

2段階：正寢殿／桃竹図。

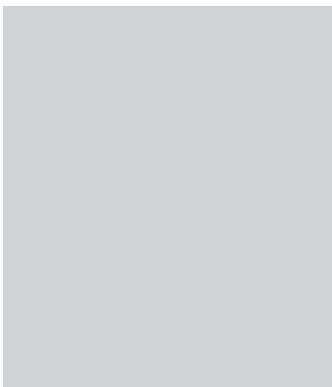
宸殿／牡丹図(東・北面右)、柳燕図(西面)、竹鶴図。

この型式存否の段階差が絵そのものの年代差を直接示すか、即断できない。後の改装などで引手がどの程度動いているかが大きな問題となる。例えば十八世紀に描かれた渡辺始興筆雪景山水図にも、明らかに年代の遡上する山楽画と同じ1段階の引手が装着されている。

背中合わせ関係になる松鷹図北面と雪景山水図南面では、新古の逆転さえ見られる。

1段階の引手は、次節で検討するように、十七世紀を降ることは考えにくい。加えて、雪景山水図西面にI b 2型式の模倣タイプ²¹⁾が三点、東面に形式の異なる引手(D群)が一点装着され、さらに西面裏側の山水間(白地)には楕円形引手(E群)が六面全て(うち二面は脱落)に装着されている(図版19-5)。これらの引手は、始興筆の杉戸絵装着の引手(挿図9)と同様に無着色である。これらを勘案すると、右の形式のいずれかが、寛深代の大改修時に追加された引手で(なおI b 2模倣型式は、D、E群と銅質が異なり、さらに後補の可能性もある)、A群引手は他の襖絵からの転用と考へたほうがよさそうである。この場合、引手の数から見て、松鷹図・山水図の背面に当初別の襖絵があった可能性が大きい。

もちろん2段階の引手を寛深時のものとする考へもありえようが、雪景山水図に2段階引手がほとんどないことと、1、2両段階の間に世紀を異にするほどの技法上の格差が認められないことから、この見方は成立しがたい。したがって、少なくともアで述べた想定のうち(3)は否定されよう。



挿図9 杉戸(農夫図)引手

表2 襖絵ごとの引手型式の現状位置

(宸殿)

名 称	番号	群	型 式	段階	付替痕	備 考
牡丹図 (東)	01	B	I d 3	2		
牡丹図 (東)	02	B	II a ア	1-1		
牡丹図 (東)	03	B	II a ア	1-1		
牡丹図 (東)	04	B	II b	1-2		
牡丹図 (北右)	01	B	I a 2イ	2		
牡丹図 (北右)	02	B	I a 2イ	2		
牡丹図 (北左)	01	B	I b 2イ	1-2		
牡丹図 (北左)	02	B	I d 1イ	1-2	◎	付替痕同大
牡丹図 (北左)	03	B	I c 1イ	1-1		
牡丹図 (北左)	04	B	I d 3	2	◎	
牡丹図 (北左)	05	B	I c 1イ	1-1	○	
牡丹図 (北左)	06	B	I c 2ア	1-1	◎	
牡丹図 (北左)	07	B	I c 1ア	1-1	◎	付替痕やや大型
牡丹図 (北左)	08	B	II a ア	1-1	◎	付替痕同大
牡丹図 (西)	01	B	I c 1イ	1-1	◎	
牡丹図 (西)	02	B	I c 3イ	1-2		
牡丹図 (西)	03	B	I d 1イ	1-2	◎	
牡丹図 (西)	04	B	I d 2	1-2		
紅白梅図	01	B	I d 3	2	◎	付替痕は二重、同大
紅白梅図	02	A	II a 2	2	◎	近年の転用
紅白梅図	03	B	II c イ	2		
紅白梅図	04	B	I c 1イ	1-1		
紅白梅図	05	B	I d 2	1-2	○	
紅白梅図	06	B	I c 2ア	1-1	○	
紅白梅図	07	B	I d 1ア	1-1	○	
紅白梅図	08	B	II c ウ	2		
竹雀図	01	B	I d 3	2		
竹雀図	02	B	I c 1イ	1-1		
柳燕図 (東)	01	B	I d 1エ	2	◎	
柳燕図 (東)	02	B	I c 1ア	1-1		
柳燕図 (東)	03	B	I d 1イ	1-2		
柳燕図 (東)	04	B	I c 1ア	1-1	○	
柳燕図 (西)	01	B	I c 2イ	2	◎	付替痕やや小型
柳燕図 (西)	02	B	II c ウ	2	◎	
柳燕図 (西)	03	B	I d 2	1-2		
柳燕図 (西)	04	B	I c 1ア	1-1	◎	対称位置に付替
竹鶴図 (西)	01	C				
竹鶴図 (西)	02	B	II c イ	2		
竹鶴図 (西)	03	B	I d 1エ	2		
竹鶴図 (西)	04	B	I d 1エ	2		
竹鶴図 (南)	05	B	I c 3ア	1-1		
竹鶴図 (南)	06	B	I d 3	2	○	
鶴図	01	B	I a 2イ	2	○	
鶴図	02	B	I c 1イ	1-1		
松図	01	—				
松図	02	B	II c ア	1-1		
松図	03	B	II a イ	1-2		
松図	04	B	I a 1イ	1-1		
柳松図 (北)	01	B	II d	2		
柳松図 (北)	02	B	I c 2ア	1-1	○	
柳松図 (西)	03	B	I c 2ア	1-1	○	
柳松図 (西)	04	B	I d 2	1-2		
柳松図 (西)	05	B	I d 1ア	1-1	○	
柳松図 (西)	06	B	I c 3ア	1-1	○	
白 (牡丹西)	01	B	I c 2ア	1-1		紙新しい
白 (牡丹西)	02	B	I c 2イ	2		紙新しい
白 (牡丹西)	03	B	I a 1ア	1-1		紙新しい
白 (牡丹西)	04	B	I d 1ウ	2		紙新しい
白 (柳燕裏)	01	B	I c 1イ	1-1		
白 (柳燕裏)	02	B	I a 2ア	2		
白 (柳燕裏)	03	B	I b 1	1-2		
白 (柳燕裏)	04	—				

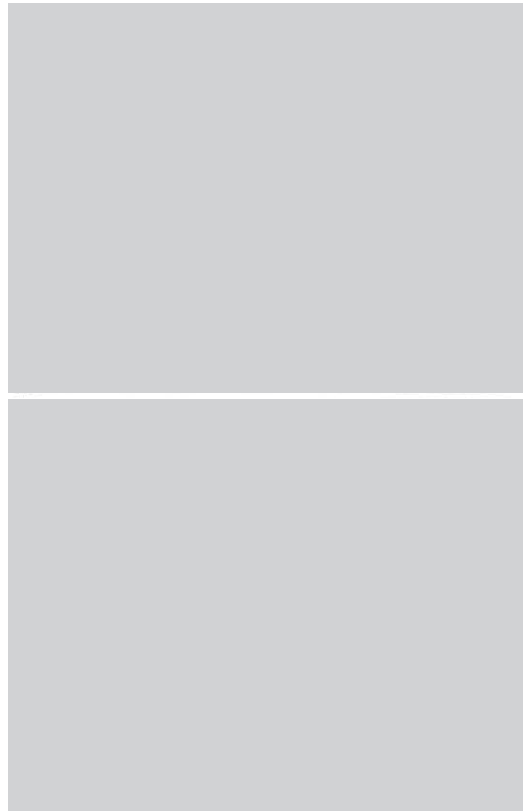
(正寝殿)

名 称	番号	群	型式	段階	付替痕	備 考
松鷹図 (東)	01	A	II c イ	2		
松鷹図 (東)	02	A	I b 1	1-2		
松鷹図 (東)	03	A	I d 1	1-1		
松鷹図 (北)	05	A	II a 2	2	◎	付替痕異形
松鷹図 (北)	06	A	II b	2		
松鷹図 (北)	07	A	I c 2	1-1		
松鷹図 (北)	08	A	II c ウ	2	○	
松鷹図 (西)	09	A	I b 1'イ	1-2	○	
松鷹図 (西)	10	A	I b 1'ア	1-1	○	
松鷹図 (西)	11	B	I b 2ア	1-1	◎	付替痕大型 (後転用)
松鷹図 (西)	12	A	I a 1'ア	1-1		
山水図 (西)	01	A	I c 2	1-1	○	
山水図 (西)	02	A	II a 2	2		
山水図 (南)	03	A	II c イ	2		
山水図 (南)	04	A	I b 1	1-2	○	
山水図 (南)	05	A	I b 2イ	1-2	◎	
山水図 (南)	06	A	I b 2イ	1-2		
雪景山水図 (西)	01	A	(I b 2)		○	模倣型式
雪景山水図 (西)	02	A	I a 1	1-1		
雪景山水図 (西)	03	A	I b 2イ	1-2	○	
雪景山水図 (西)	04	A	(I b 2)			模倣型式
雪景山水図 (西)	05	A	(I b 2)		○	模倣型式
雪景山水図 (西)	06	A	I b 2イ	1-2	○	
雪景山水図 (南)	07	A	I b 2イ	1-2	○	
雪景山水図 (南)	08	A	I d 2	2		
雪景山水図 (南)	09	A	I b 2イ	1-2	○	
雪景山水図 (南)	10	A	I b 2イ	1-2	○	
雪景山水図 (東)	11	A	I a 2ア	2		
雪景山水図 (東)	12	A	I c 1イ	1-1		
雪景山水図 (東)	13	A	I d 1	1-1		
雪景山水図 (東)	14	D			○	
紅葉図	01	A	I c 1ア	1-1		
紅葉図	02	A	I b 2ウ	1-2	◎	
紅葉図	03	A	I b 2ウ	1-2	◎	
紅葉図	04	A	I d 1	1-1	◎	付替痕二重
立木図	01	A	I b 2ア	1-1	◎	
立木図	02	A	I b 1	1-2	◎	付替痕同大
立木図	03	A	II c イ	2	◎	
立木図	04	A	I a 1'イ	1-2	◎	
桃竹図 (紅葉西)	01	A	II a 1	2	◎	付替痕同大
桃竹図 (紅葉西)	02	A	II c ア	1-1	◎	付替痕やや大
桃竹図 (竹西)	03	A	I a 2ア	2	◎	
桃竹図 (竹西)	04	A	I a 2イ	2	◎	付替痕やや小型
桃竹図 (竹西)	05	A	I b 1	1-2	○	付替痕やや小型
桃竹図 (竹西)	06	A	II c イ	2	◎	付替痕同大
桃竹図 (竹北)	07	A	I a 2イ	2	◎	付替痕やや小型
桃竹図 (竹北)	08	A	I b 2イ	1-2	○	
竹図	01	A	I b 2イ	1-2	◎	付替痕やや小型
竹図	02	A	I a 2イ	2	◎	
白 (山水間)	01	E				
白 (山水間)	02	E				
白 (山水間)	03	E				
白 (山水間)	04	E				
白 (山水間)	05	—				
白 (山水間)	06	—				

注 ・各襖絵の位置は、挿図1を参照。 ・段階、付替痕については、本文を参照。
 ・図ごとの番号は、向かって右側からの配置順を示す。 ・松鷹図04と鶴図03・04は、収蔵状況の都合で、未調査。
 ・群を一としたものは、引手が脱落していることを示す。

表3 A・B両群における同一型式の対応

A 群	I a 1	I b 1	I b 2ア	I b 2イ	I c 1ア	I c 1イ	I c 2	I d 1	II c ア
B 群	I a 1ア	I b 1	I b 2ア	I b 2イ	I c 1ア	I c 1イ	I c 2ア	I d 1ア	II c ア



挿図10 引手付替え痕跡 (上：◎、下：○)

ともあれ、寛深代に雪景山水図周辺で、引手がかなり動いたのは間違いない。にもかかわらず、前述のごとくA・B両群が建物ごとにまとまり、また相当に明確な新古の色分けができるのは、後の大改修でも、引手が全体にわたって入り乱れるようには動いていないことを示す。「型式存否の段階把握」という資料操作法の有効性は、十分保証されている。

ウ、引手の付替え痕跡

次に、引手の交換、あるいは襖絵の改装経緯を知る手掛かりとして、引手の付替え痕跡の状況を検討する。表2では、付替え痕が引手現位置と大幅にずれて見られるものを◎、引手現位置にほぼ重なって見られるものを○で示した(挿図10)。後者は、引手のゆるみを補正する際に生じたものも含まれ、引手交換や改装によるものとは限定できない。しかし前者は、引手位置の移動に伴うもので、その

襖が改装された、あるいは別の引手が装着された可能性は相対的に大きいと言える。

図ごとの付替え痕の状況を見ると、◎が次の図に集中しているのが判る。

正寝殿／紅葉図、立木図、桃竹図、竹図

宸殿／牡丹図(北面左・西面)、柳燕図(西面)、竹鶴図

これらの図は、画面の観察においても不連続線があったり、襖の組合せが混乱している部分があったりして、²²⁾改装や、旧位置からの移動などが行われたことが明白である。

エ、襖改装・追加の諸段階

さて、以上に述べた引手新旧型式の存否と改装痕跡から、引手も含めた襖の改装・追加の経緯はどのように説明できるだろうか。

前述のように、雪景山水図西面のI b 2 模倣型式あるいはD・E群を十八世紀寛深代の後補だとすると、新旧二段階の引手の存在は、寛深以前に大規模な改装があったことを示唆している。この時、次の状況が想定される。

・松鷹図北面、山水図、柳松図、紅白梅図など2段階引手が散見するものは、一部痛んだ引手が取り替えられた(松鷹図05や紅白梅図01などは、位置の調整を伴ったものか)。

・この時はずされた引手は、寛深代に雪景山水図の引手として再利用された。

・紅葉図、立木図、牡丹図北面左・西面などは画面が大きく改装されるが、引手は1段階引手が再利用された。なお牡丹図北面右と東面に2段階が集中するのは、絵自体が狩野説のようにこの時補充さ

れた可能性を示唆する。

・2段階引手が半数以上を占め、かつ付替え痕跡も著しい桃竹図と柳燕図は、引手の大幅な新調を伴う全面改装であった。
・2段階引手が集中するが、付替え痕のない竹鶴図は、この時に描かれ追加された。

かかる理解に立つならば、2段階引手新調時の改装は、寛深代の改装以上の規模で、正寝殿・宸殿全体に及ぶものであったと言わざるを得ない。また、この時追加された竹鶴図（牡丹図北面右・東面もか？）や後に加わった始興画を除く大半の水墨・金碧画は、1段階引手の製作された時点で存在していたことになる。1段階引手の襖で改装痕・付替え痕を認めないものが相当残ることから推しても、アで述べた想定（1）、すなわち障壁画群の描かれた際のオリジナルが1段階引手であることはほぼ疑いない。

以上を総合すると、1段階引手と襖絵は正寝殿・宸殿の前身建物に伴うもので、しかも両建物と大半の障壁画は、同じ場所ではほぼ同時期に成立したと結論づけることができる。また2段階引手新調時の大規模改装は、両建物が大覚寺へ移建された時点しか考えられないであろう。

四 障壁画の成立事情

ここでは、前節の結論を踏まえ、障壁画群がいつどのような事情で成立したのか、諸氏の見解に立ち帰りつつ考えてみたい。

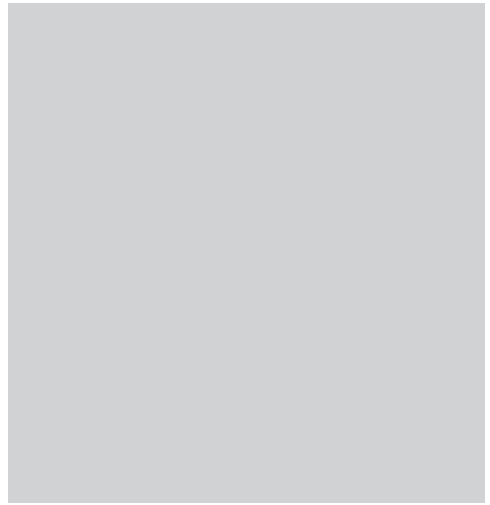
ア、引手の製作時期

1段階の引手はいつごろ製作されたのであろうか。大覚寺のような間弁四弁花形の引手形態は、桃山〜江戸前期の障壁画通有のものであるが、中で葵紋・唐草文・連弧状七宝形区画が組合わさる文様モチーフをもつ例は、管見では二條城二の丸御殿障壁画に見出される。同御殿は周知のごとく、徳川家康が御所の守護と將軍上洛時の宿泊所として、慶長六年（一六〇一）に造営を開始、同八年に完成を見た。障壁画制作には、幕府御用絵師、狩野宗家の光信らがあり、これに山樂も参加したとされる。下って寛永元年（一六二六）、御水尾天皇を迎えるため整備拡張されたが、現在残る障壁画群は、この時山樂・探幽・興以下が制作したもので、慶長度造営時の障壁画は残っていないと考えられている。²³

二百面以上に及ぶ襖に現在見られる引手の形式は後補も含み様でないが、縁座の主区や手掛かり見込みに葵紋を配置し、空間を唐草文で飾るのは共通する。魚々子の地を黒色とし、唐草はやや浮き立つ表現であるが、主区と副区の組み合う縁座区画の基本割付や形態・文様表現は大覚寺引手と親縁性が強い。

ただ多くの引手は、主区が副区に比して大覚寺引手よりも肥大化し、裝飾性が進んだ印象を受ける。それに対して、黒書院二之間の楼下雉子図や蘇鉄の間杉戸の牡丹図などに、区画バランスが大覚寺と近似した引手がわずかに存在する。これは手掛かり見込みを七宝形に区画することも共通する（挿図II）。

前者のような区画割付は、副区を二条あるいは三条棒形とする「二ツ筭形」、「三ツ筭形」につながって展開していくよう²⁴で、南禅寺方丈の探幽画など寛永期前後の障壁画に例を多く見ることがができる。



挿図11 二條城二の丸御殿 杉戸引手

これらは、数の上から見ても、寛永度改修時のものと見なして大過あるまい。一方わずかに残る後者の引手は、古相とも受け取れるが即断できない。慶長度造営時のものがわずかに残った可能性も考えてみたいが、ともあれ、これらの二條城引手が、大覚寺1段階引手の製作年代の下限を示唆しているように思われる。

なお、この年代観の傍証として、名古屋城本丸御殿障壁画の引手を取り上げたい。同障壁画群は、慶長十九年(一六一四)完成の玄関・表書院・対面所のものと、寛永十一年(一六三四)完成の上洛殿および付属建物のものである。²⁵⁾ 前者の引手は、唐花文に唐草の組み合う文様だが、四弁花形縁座の全体形状や鑿彫法等は大覚寺引手に近い。しかし後者では、葵紋を主文としながらも三ツ筭形となり、主区・副区の割付線は直線的で硬直化した印象を受ける。反面、地文の七宝繫文はきわめて細密な表現で、加えて小座や手掛り底板に有線七宝を施している、桂離宮中書院引手²⁶⁾と共通する寛永期特有の裝飾化の進行が認められる。さらに、同じく寛永期に造築され、以後修築

が重ねられた日光東照宮拝殿の杉戸にも、二條城と同じく葵紋に唐草文を組み合わせる引手が見られるが、これも三ツ筭形である。

十七世紀代の引手の変遷については、稿を改め再論を期すとして、ここでは、以上の比較検討から、大覚寺1段階引手の製作年代が寛永初年ごろを下限として、慶長期後半から元和期にかかる時期と見なされること、そしてそれが、結果的に水墨・金碧画の諸氏年代観の幅に納まることを確認しておきたい。

イ、正寢殿・宸殿の前身

如上のように同時期、同所で造営された可能性の高い正寢殿・宸殿は、いかなる建物であったのか。引手の葵紋を根拠に宸殿の前身を東福門院御所に求めた藤岡通夫氏の見解を先に示した。序で述べたように、当該期の障壁画引手のデザインは、十分な検討を経てしるべき理由に基づき決定されたと考えられる立場から、同説を方法論的にも積極的に支持したい。その使用を厳しく制限された葵紋であればなおさらのこと、大覚寺自体に徳川家との積極的な関わりが見出されない以上、建物プランの検討も合わせた藤岡説は十分な説得力をもつと思われる。

なお、同じく葵紋引手に注目し、正寢殿改造と宸殿移建工事の連関を指摘した大森健二氏の見解は、襖の改装経緯やその年代観から、従うことはできない。

また本論の結論は、両建物に残る襖絵の数の多さから正寢殿も東福門院旧殿を移したものと考えた木村重圭氏の見解と結果的に一致した。しかし竹鶴図を始興画とし寛深代改修時の追加と考へ、移建時の襖絵追加を認めていない点は、本論と異なる。あえて引手の2

段階目、大覚寺への移建時期に言及すれば、寛永期よりも以降、おそらくは十七世紀後半のある時点と思われる、宸殿を貞享三年（一六八六）移建とする寺伝が事実かも知れない。言うまでもなく、件の竹鶴図はこの時に描かれたことになる。

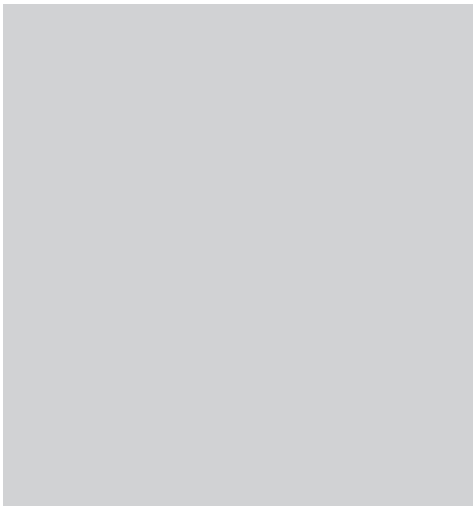
ただし本論の理解に立つと、川本桂子氏や狩野博幸氏のいう、山楽画の水墨画（山水図・松鷹図）↓金碧画という流れ、あるいは上限を山楽の画風の「激変」する大坂城落城、すなわち元和元年以前とする様式論的考え方と齟齬をきたすこととなる。絵画論に対する検討は筆者の力量の及ぶところではないが、ただ一点、山楽の画風が大きく変わるのは事実としても、その現象を豊臣家から徳川家へ御用先が変わったという歴史的事象と直結させることの手続きには、疑問がない訳ではない。ともあれ、大覚寺山楽画に年代差があり、かつ元和元年以前に描かれたのが動かないというのであれば、前身の東福門院御所障壁画群は、さらにまた複雑な前歴をもつという結論に立ち至ってしまう。さすれば、そこには一体いかなる引手が装着されていたのであろうか？

五 大覚寺引手の製作工房

これまで展開した議論は、あくまで引手金具を研究素材とすることの有効性を確認するためのケーススタディに過ぎない。試みた型式分類と組列作業は、障壁画群の複雑な改装過程をたどる指標として、引手の潜在的資料性を引き出す有効な手段であった。しかしそれにとどまらず、かかる作業は、引手を製作した金具工房の内側を探るための重要なプロセスでもある。

挿図8で示した型式組列は、障壁画成立時の引手製作の状況をよく物語っている。製作に複数の下図が用いられたのはほぼ確実に、それらはモチーフを共通としながらも、端的には唐草の反転表現などを微妙に違えるものだった。また工人も単独でなく、少なくともa類、b類、c・d類で手を異にしている。文様彫法に多様な組合せを生じていることから、工程を分けて分業製作していた可能性もあり、1段階中でも微小な型式変化が存在することもあいまって、最低でも数名程度の工人が関与したと考えざるを得ない。

ここで、大覚寺引手のかかる状況が該期の障壁画群の中で一般的であったかが問題となる。まだ十分な調査データを持ち合わせてはいないが、例えば寛永期に狩野探幽周辺の画家が描いたとされる正法寺（京都府八幡市）大方丈障壁画群²⁷に付属する同一形態・文様の引手三十九個（挿図12）は、下図が二タイプに分かれるが、各々はきわめて厳密に下図をトレースしていて、彫法も全くばらつきがないのは大覚寺と対照的である。金具工人は一〜二人と見ていい。



挿図12 正法寺大方丈襖絵引手

大覚寺引手の製作は、数人規模の工房における協業的生産といえる。短期間に大量の引手を製作するがゆえの必然とも受け取れるが、むしろ東福門院御所という当時の最高権力者の仕事に関わる金具工房の工人組織の大きさとして理解すべきであろう。該期の金具工房の規模や工人組織は、決して一様ではなかったのである。

また、この種の引手が狩野派の手になる障壁画群に多く見られるのも気にかかることである。論証は今後の課題としたいが、金具工房間にも絵師の世界に似た序列があり、絵師集団の系統と金具工房の系統は相互に何らかの関係をもつことが多かったのではないかと予測している。

結 語

本稿では、大覚寺襖絵付属の百二十個に及ぶ引手を型式分類し、二つの製作段階を抽出して、その型式存否パターンと引手付替え痕跡の検討を行った。その結果、建物と障壁画成立に関わる諸説のうち、藤岡説を大方で追認することとなった。加えて正寝殿も宸殿と同じ前身をもち、障壁画群は同時に成立したこと、大覚寺移建時に襖絵や金具の新調を伴う大幅な改装があったことを明らかにした。また、引手の型式組列から工人組織を想定し、旧東福門院御所に関わった金具工房の協業性と、絵師集団との関連性を予想した。銘や文献等で実像の掴みにくい金具工人の組織や系統、工房の横のつながりなどを知るために、パターン化された製品群である引手金具は、今回触れることのできなかつた建築金具と共に、すぐれて有効な素材であると思う。

小稿により、引手等の金具研究に多少なりとも市民権が与えられ、その結果として、それらの写真や計測データが障壁画あるいは建築の調査報告に少しでも増えることになれば幸いである。

調査・執筆にあたり、嵯峨御所大覚寺に多大のご協力を賜わった。また二条城事務所、正法寺にも調査・写真掲載のご高配を賜わった。記して深甚の謝意を表する次第である。

〔注〕

- 1 全容は、『嵯峨御所 大覚寺の名宝』（京都国立博物館特別展覧会目録 一九九二）や、『大覚寺』（主婦の友社 一九七五）を参照されたい。
- 2 北尾春道『国宝書院図聚』第六卷（一九三八）。中村直勝『大覚寺の歴史』（前掲『大覚寺』所収）。
- 3 藤岡通夫『京都御所（新訂）』（中央公論美術出版 一九八七）。なお藤岡氏は、山楽の画業史の中で大覚寺宸殿の筆者とするのは考えにくいと述べている。
- 4 土居次義『大覚寺の桃山障壁画』『障壁画全集 大覚寺』（美術出版社 一九七六）
- 5 木村重圭『大覚寺の障壁画について』『大覚寺の名宝展』（姫路市立美術館展覧図録 一九九一）
- 6 川本桂子『友松・山楽』（小学館ギャラリー名宝日本の美術21 一九九一）
- 7 藤岡氏はこれ以前に、円満院宸殿が東福門院関連建築物のうち「御局」であると考え、引手に葵紋を見ないことを東福門院御殿でないことの根拠としていて、川本氏と全く逆に理解している（前掲『京都御所』一九五六年版。「円満院宸殿の研究」と題し『近世建築史論集』一九六九年刊に補筆再掲）。この点について、川本氏のコメントはない。
- 8 狩野博幸『宸殿・正寝殿の障壁画』（前掲『嵯峨御所 大覚寺の名宝』）
中村昌生『大覚寺正寝殿および宸殿について』（前掲『障壁画全集 大覚寺』）
- 10 大森健二『大覚寺の建築』および図版解説（前掲『大覚寺』）

- 11 前掲土居氏論文
- 12 前掲川本氏論文
- 13 前掲狩野氏論文
- 14 前掲木村氏論文
- 15 例えば『重要文化財妙心寺大方丈修理工事報告書』(京都府教育委員会一九五九)に引手の拡大写真を掲載するが解説はない。
- 16 最近の青木弘治他『重要文化財寶林寺仏殿・方丈修理工事報告書』(修理委員会一九九〇)では、金具類の実測図に解説が付されており評価される。
- 17 河田貞「飾金具の調査」『桂離宮御殿整備記録』(宮内庁一九八七)
- 18 手掛かり部は、縁座と簡単に分かれるので、後世の改装等で組合せが混乱していることが予想される。そのため小稿では、専ら縁座文様による分類を考察の基礎とした。
- 19 考古学と美術史の間の「様式」「型式」等の概念について比較考察したものに、贅元洋「様式と型式」(『考古学研究』第三十八卷第二号 考古学研究会一九九二)がある。
- 20 現代の金工職人への聞き取り調査でも、同様のことが聞かれた。また原因があっても、これを銅板に転写せずに直接彫り込む場合もあると
- 21 のことで、職人により、あるいは同一職人でも場合によって、細部の工程に違いがあるのが普通らしい。
- 22 紅白梅図01には二重の付け替え痕があり、また同02はA群の混入で、明らかに後代の付け替えと判る。したがって牡丹図は当初1段階引手が装着されていた公算が大きい。
- 23 文様を比較的忠実に模倣するが、鍍金や唐草の着色を行わない。
- 24 とくに桃竹図、立木図、柳図の混乱が著しい。
- 25 土居次義・武田恒夫他『元離宮二條城』(小学館一九七四)。前掲『友松・山楽』。
- 26 二ツ筭形引手は、例えば慶長七年から十年の間に徳川氏が造営した伏見城本丸御殿が前身とされる正伝寺方丈障壁画に見られる。しかしこれは、以後南禅寺金地院、そして正伝寺と移建された際の大規模改装に伴うことが明かで、雪景山水図などに残る付替え痕跡は、現引手と形状が異なる。
- 27 磯博『名古屋城障壁画集成』(京都書院一九七九)
- 28 前掲河田氏論文
- 29 冷泉為人「正法寺の障壁画」(『日本美術工芸』六四三〜六四五 一九九二)。